

第4学年 国語科学習指導案

1 単元名 つながりを見つけながら読み、おもしろいと思ったことを伝え合おう 「友情のかべ新聞」

2 単元の目標

- 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすることができる。〔知識及び技能〕(1)オ
- 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わり結び付けて具体的に想像することができる。〔思考力、判断力、表現力等〕C(1)エ
- 言葉がもつよさに気付くとともに、幅広く読書をし、国語を大切に、思いや考えを伝え合おうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕

3 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすることができる。(1)オ	・「読むこと」において、登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。 C(1)エ	・積極的に登場人物の気持ちの変化や性格について、場面の移り変わりと結び付けながら想像して読み、学習の見通しをもって、おもしろいと思ったところを伝え合おうとしている。

4 単元について

(1) 本単元で扱う教材と行う言語活動について

本単元では、「友情のかべ新聞」という文学的文章の中でもミステリーに分類される作品を扱う。ミステリー作品を読むことは、物語の布石や伏線を見つけ、それらを結末などと結び付けて意味を見出したり、新たな結び付きを発見したりするところにおもしろさがある。「友情のかべ新聞」では、性格が正反対の「東君」と「西君」が起こした出来事の秘密を同じクラスの「ぼく」が、二人の言動を追いながら探ろうとする内容となっている。同じような事柄が何度も出てきた際、どのように描写されているのかに着目し、場面同士のつながりを考えることが秘密を探る鍵となっている。「なぜ？」と思うような登場人物の行動や様子を、他の叙述とをつなげ、その理由を想像しやすいことが特色であると言える。

そのような特色がある「友情のかべ新聞」を教材として、本単元では、叙述のつながりを見つけ、おもしろいと思ったところについて、紹介カードとしてまとめ、伝え合う言語活動を行う。登場人物の性格や様子に着目する児童、出来事やぼくの推理に着目する児童、かべ新聞の書かれ方に着目する児童など、おもしろいと思うところは多種多様にあると予想される。読者として自分が感じたおもしろさだけでなく、友達のおもしろさの捉え方を理解することで、違いを認められるようになる。また「おもしろさ」という言葉については、児童と対話しながら、いろいろな捉え方があってよいことを確認する。例としては、「(自分が)好き」「笑

ってしまう」「読みたくなる」「印象に残る」「(先が) 気になる」などが挙げられる。

第一次ではまず、物語のおもしろさについて考える。これまでの学習や経験を振り返ることで、本単元における自分の学びを自覚できるようにしていきたい。また、単元のゴールとして、「友情のかべ新聞」から自分がおもしろいと思った部分を紹介カードにまとめること、並行読書を行い、選んだミステリー作品でそれぞれの紹介カードを作成することを伝え、学習の見通しをもつ。また初発の感想として、不思議に思ったところやおもしろいと思ったところを書いていく。おもしろさや不思議さを内容ごとに項目立てし、読みのめあてとしていきたい。具体的には、登場人物（やその変化）・推理・出来事などが予想される。

第二次では、教材文を読み、登場人物の人物像や気持ちの移り変わりについて、場面や会話を結び付けながら解釈を深め、自分がおもしろいと思った部分について考え、紹介カードにまとめていく活動を行う。文章を引用したりキャッチコピーを考えたりしながら、人を引き付ける表現についても意識させていきたい。

第三次では、第二次で作成した「友情のかべ新聞」の紹介カードを基に、自分が選んだミステリー作品の紹介カードを作成する。全校児童が目にする図書室に掲示するという目的意識を明確にして取り組んでいく。

単元の導入でミステリー作品の教師のモデルをいくつか提示し、見通しをもって紹介カードの作成に取り組めるようにしていきたい。

（２）本単元で身につけさせたい力と手立て

【身につけさせたい力について】

学習指導要領の「知識及び技能」の（１）「オ 様子や行動、気持ちや性格を表す語句の量を増し、話や文章の中で使うとともに、言葉には性質や役割による語句のまとまりがあることを理解し、語彙を豊かにすること」と「思考力、判断力、表現力等」のＣ「読むこと」の（１）「エ 登場人物の気持ちの変化や性格、情景について、場面の移り変わりや結び付けて具体的に想像すること」を受けて設定している。

これらの指導事項を受け、児童に身に付けさせたい力は、「叙述のつながりに気付き、物語のおもしろさを根拠とともに伝える力」である。本単元では、教材文の学習と並行してミステリー作品の読書を行い、教材文の学習を通して身に付けた紹介カードの書き方を基に、並行読書した作品の紹介カードを書く活動を行う。自分が選んだミステリー作品のおもしろさは何か、相手が納得するような根拠を見付け、わかりやすく表現できるようにしていく。そのために、単元の導入では、教師が作成した紹介カードのモデルを示し、見通しをもって取り組めるようにしていきたい。また、教材文の紹介カードを作る際に友達と交流して、よりわかりやすい表現方法について考え、第三次の活動につなげていきたい。

【手立てについて】

（１）おもしろさを明確にするための紹介カード

おもしろさを伝えるためのツールとして紹介カードを活用する。「本のポップや帯を作ろう」での学習を参考に、紹介カードには、①本の題名②作者③物語のおもしろさと関連する引用やキャッチコピー④おもしろいと考えた理由や感想を書くようにする。キャッチコピーの場合は理由や感想に引用部分を用いるなど、自分がどこに着目したかを明確にできるようにするとともに、その引用が自分の考えの根拠となる叙述の１つであることを意識させていきたい。

(登場人物に着目した参考例)

①「友情のかべ新聞」／②はやみねかおる

③仲が悪い２人が１つの新聞を書くことに。

どんな新聞ができるのか！？

④

東君と西君という登場人物が出てきます。

まず名前にユーモアがあります。主人公の２人は東君と西君・・・北君と南君も出てきそうですね。でも、覚えやすいんです。２人は「好きなものが正反対で、いつもたいこう心をもやしている。」とても仲が悪いことでも有名なんだそうです。名前も性格も反対向きですね。

そんな２人が１つの新聞を書くことに。いったいどんな新聞ができると思いますか？

(２) 読むことへの意欲化

並行読書を行いながら、本単元の第三次では児童それぞれが選んだ本で紹介カードを作成する。国語科の学習だけでなく、他教科の学習において関連図書コーナーを設置し、様々な本と出会う機会を設けてきた。本単元でも図書館指導員と連携し関連図書コーナーを設けるとともに、図書の時間で行われている読み聞かせでミステリー作品を取り上げ、謎を解明していく楽しさを味わわせ、興味関心を高めていきたい。また毎年１０月～１１月にかけて行われている読書量調査に関連させ、本単元で記した紹介カードを図書室に掲示することを伝える。学習としてのゴールだけでなく、その後の学校生活に学びの足跡を感じることができれば、学習の有用感も高まっていくと考える。

(３) 語彙を増やす

おもしろさを見つけるため、感想をもつ力は、様々な場面において必要となる。何かの発表を聞いて感想を述べる、話し合いに参加するために自分の考えをもつ場合にも、まずは自分がどのように感じたかを言語化する必要がある。しかし、日ごろの児童が書く感想などの文章を見ていると、「すごい」「楽しい」「面白い」といった単一的な言葉が並び、語彙力が乏しい様子がうかがえる。

児童の語彙を増やすために、教科書巻末にある「言葉のたから箱」を活用する。人物を表す言葉、物や事がらの様子を表す言葉、気持ちを表す言葉が紹介されている。朝学習などで気になる言葉を調べたり例文作りをしたりしながら、理解できる言葉、使える言葉を増やし、児童の語彙を豊かにし、紹介カードにおける文章表現の工夫を促していきたい。

6 指導と評価の計画（9 時間）

次	時	学習活動と内容	○教師の指導・支援 ◆評価
第一次	1	○これまでの学習を振り返り、どの様に物語を読んできたかを振り返る。 ○学習の見通しをもつ。 ○「友情のかべ新聞」のおもしろいとおもったところをかく。 ○ミステリー作品から読みたい本を選び、並行して読み進める。（課外）	○物語のおもしろさとは何かを考え、学習前と学習後で比較し、学習したことを実感できるようにする。 ○題名について考えるとともに、結末部分の挿絵を提示し、想像を広げられるようにする。 ○教師の紹介カードモデルを提示し、単元のゴールを確かめる。 ◆単元のめあてを確かめ、見通しをもって学習に取り組もうとしている。 （主）【発言・ノート】 ○ミステリー作品を集めた図書コーナーを作成し、様々な作品に出会う環境を整える。
第一次	2	○「友情のかべ新聞」で試しの紹介カードを書く。 ○おもしろいと思ったところを紹介し合い、おおまかに分類する。 【分類の例】 ・登場人物 ・登場人物の変化 ・出来事（キーアイテム） ・推理 ・文の構成 ・表現の仕方 ・挿絵 など ○学習計画を立てる。	○試しの紹介カードを書くことで、特に着目したおもしろさの相違点を明確にし、児童の思考のズレを意識できるようにする。 ○紹介カードを書いていくために、今後の学習への必要感をもてるようにする。 ○さらに、初発の感想として前時に書いた「友情のかべ新聞」でおもしろいと思ったところや不思議に思ったところを学級全体で共有する。 ○似ている内容ごとにまとめ、項目を立てる。児童の考えをもとに項目立てを行うが、難しい場合には【分類の例】を提示し、どんなところに着目しているかを投げかける。 ○項目をもとに整理し、読みの視点とすることで、学習計画を立てる。

第 二 次	3	○登場人物の人物像を捉える。 ○時間の経過に沿いながら、どんな出来事が起こったのかを捉える。 ○登場人物に関連して、自分がおもしろいと思ったところを話し合う。	○登場人物のつながりとして、主人公である東君と西君が対比的に描かれていることを確かめる。 ○時間のつながりとして、1週間の行動について書き出し、2人の様子の変化していることを確かめる。 ○色別のサイドラインを使用したり、図表に整理したりして、視覚的に捉えやすくする。 ◆登場人物の性格を、叙述をもとに確かめている。 (思・判・表) 【ノート】
	4	○登場人物がどのように変化したのか、物語の展開を捉える。 ○登場人物の変化に関連して、自分がおもしろいと思ったところを話し合う。	○物語全体のつながりとして、物語のはじめとおわりを比較し、登場人物がどのように変化したのかを考える。 ◆登場人物の気持ちの変化について、場面の移り変わりと結び付けて具体的に想像している。 (思・判・表) 【ノート】
	5 (本時)	○「ぼく」は何を手がかりに推理したのか、場面と場面のつながりを考える。 ○推理に関連して、自分がおもしろいと思ったところを話し合う。	○「ぼく」の推理がどの部分かを確かめることで全体の作品構成を意識できるようにする。 ○「ぼく」は何を手がかりに推理したかを考えられるようにする。 ◆叙述を基に「ぼく」の推理と手掛かりとなる出来事を結び付けて読み、場面と場面のつながりを考えている。(思・判・表) 【ノート】
	6	○おもしろいと思ったところを具体的な理由を挙げて紹介カードにまとめる。	○教師のモデルを参考に、紹介カードをまとめるよう助言する。 ○理由や感想を書く際には、「言葉のたから箱」を参考に、新たな語彙を積極的に活用していくことを促す。 ◆「友情のかべ新聞」でおもしろいと思ったところについて、根拠を明確にして紹介カードにまとめている。 (思・判・表) 【紹介カード】

	7	○紹介カードを基に、おもしろいと思ったことを話し合う。	○いろいろな友達と交流し、それぞれに面白いと思ったことの共通点や違いを味わえるようにする。 ○引用やキャッチコピーと感想部分の内容が合っているか、また人を引き付ける表現になっているかを確認、助言するように伝える。 ◆紹介カードを基に、進んで自分の思いを伝え、友達と交流している。 (主) 【発言】
第三次	8	○並行読書で読んだミステリー作品の紹介カードを作成する。	○教師のモデルや「友情のかべ新聞」の紹介カードを基に作成するよう助言する。 ○引用が複数の文となってもよいことを伝える。 ◆自分が選んだ本で引用したりキャッチコピーを考えたりしながら、根拠を明確にし紹介カードにまとめている。(思・判・表) 【紹介カード】
	9	○選んだ作品で、おもしろいと思ったところを伝え合う。 ○学習を振り返る。	○物語のおもしろさとは何かを考え、学習前と学習後で比較し、学習したことを実感できるようにする。 ◆学習を振り返り、物語のおもしろさについて自分なりに考えている。 (主) 【発言】

7 本時の指導 (5 / 9)

(1) 本時の目標

○叙述を基に、「ぼく」の推理と手掛かりとなる出来事を結び付けて読み、場面と場面のつながりを考えている。(思・判・表)

(2) 展開

学習活動と内容	教師の指導・支援	評価【方法】
1 前時までの学習を振り返る。 ・登場人物のキャラクターがおもしろい。 ・東君と西君が仲良くなっていく様子もおもしろさだったよね。	○どんなおもしろさに注目しながら読んだのか、読みの視点を確認する。 ○ミステリー作品の特徴として、推理や謎解き部分があること、本文中の推理部分を確認する。	
2 本時のめあてを確認する。	「ぼく」は何を手がかりに推理したのか。	

3 「ぼく」の推理の手がかりとなる出来事を見つける。 ・「プリンには見向きもしなかった」と「残ったプリンを取り合う」「プリンは取りにも行かなかった」は同じプリンが出てくるけど、どうしてだろう。 ・「お互いから目を離せなくなり」という推理は、二人が一緒にいることが増えたからかな。 4 推理に関連させて、自分がおもしろいと思ったところをグループで紹介する。 5 本時の学習を振り返る。 6 次時の確認をする。	○出来事が書かれた部分と「ぼく」の推理が書かれた部分を比べ、結び付くと思った叙述同士を線で結ぶように声をかける。 ○場面をつなげて読むことが難しい児童には、登場人物の性格から好きなものや嫌いなものを取り上げ、推理部分にもそういった言葉がなかったか確かめるように伝える。 ○推理の根拠となる出来事が見つからない場合には、登場人物のいつもとは違う行動や表情の違いなどの様子を手がかりとするように伝える。 ○個人でつながりを考えた後、グループでの活動を行う。学力を考慮し3人～4人グループ編成をする。 ○グループのメンバーを入れ替え、おもしろさや根拠となる叙述が広げられるようにする。 ○自分がおもしろいと思ったところを、叙述を紹介しながら話すようにする。 ○複数の叙述に関連させている児童を称賛し、叙述のつながりを意識させる。 ○「初めて気付いた」「自分もおもしろいと思う」など、聞き手は自分の反応を明確にすることを確認する。 ○次時は、「友情のかべ新聞」で紹介カードを書くことを確かめ、見通しをもてるようにする。	○叙述を基に「ぼく」の推理と手掛かりとなる出来事を結び付けて読み、場面と場面のつながりを考えている。 (思・判・表) 【WS・ノート】
--	---	---